あとがき

自分の最初の単著が「情報」とか「ネットワーク」とかいう言葉をタイトルに冠したものになろうとは、大学院生として曲がりなりにも研究生活のスタートを切った1986年当時には想像もつかなかった。当時の私の主な関心の対象はフランクフルト学派の社会思想にあり、その基本的関心自体は、本書でもハーバーマスの理論から枠組を借りるというかたちで継続してはいる。しかし、その枠組に収めて語る対象となった「インターネット（空間）」なるものは、当時の私にとっては（そしておそらく、ほとんどの日本の社会学研究者にとっては）存在しないも同然であった。

端末画面の向こう側に広がる世界への私の関心は、1990年前後、趣味としていくつかのパソコン通信ネットワークに参加したことからはじまった。つまりそれは学問的・職業的な関心からくるものではなく、純粋に私個人の私的生活圏の中での出来事であった。しかしその世界への関心はやがて「趣味」の範囲を大きく越え、学問的・職業的生活を圧迫するまでに高まることになる（それは学問的・職業的世界においては、直接的・短期的にはネガティブな影響しかもたらさなかったという意味においてである）。その一方で、この世界での人々との出会いは私個人の私的生活史の中でいくつかの記憶に残る出来事をもたらしたが、ここはその詳細について語るべき場所ではない。ただ、それほどにパソコン通信の世界が私にとって強い誘因をもった場所であったということを記すにとどめたい。その理由を説明するのに、「理想的コミュニケーション共同体」といったハーバーマス的表現を用いるのはさすがに気恥ずかしさを覚えるが、当時の私

がパソコン通信に対して抱いていた思いを今あえて学問的言語で表現しようとすれば、他に適当な言葉がみつからない。

幸か不幸か、この世界への私的関心は、やがて学問的関心と重なり合うものへと変容していった。しかしながらその出発点はやはり、学問とはほとんど無関係に、パソコン通信という世界の中で出会った人々とのコミュニケーションそのものにもっぱら没頭していた頃の記憶にある。とりわけ、私自身が運営していたBBS "WITH-NET"での記憶——より正確にいえば、その記憶への郷愁——は、本書の内容にも直接に反映している。ほんの半昔から一昔前の記憶に対して「郷愁」という言葉を用いざるをえないという事実は、本文中でも触れたように、情報ネットワーク社会という舞台の中でのパソコン通信からインターネットへの主役の交替という出来事を反映している。現在のインターネットに対する本書の視点が一種の屈折を含んでいるのは、そのためでもある（ちなみに、本書への引用許可を得るために当時の通信記録を電子メールでお送りしたWITH-NET元会員の方々からも、ほぼ異口同音に「懐かしい」という感想をいただいた）。

『インターネット空間の社会学』という、下手をすると時流への迎合とも受けとられかねないタイトルとは裏腹に、本書の問題関心や主張がもし一種の「反時代的」な印象を読者に与えたとすれば、その理由の一端は——枠組とした「近代主義者」ハーバーマスの理論よりはむしろ——そうした個人的な記憶と郷愁に由来するものである。それらに学問的言説という形式を与える変換作業の道具となったのが、学問的・職業的生活の中でフォローしてきたハーバーマスの理論であった、といってもよいだろう。

改めて全体を読み返してみると、序論で提示した「ギデンズやカステルの『情報化』論が切り開いた新たな方向性に対して……現実の『情報化』過程により即しつつ、システムのレベルのみならず生

活世界のレベルをも対象に含め……アプローチしようとする試み」という意図は、必ずしもその言葉通りには十全に実現されていないことを認めざるをえない。とりわけ第5章の最後を「理論的ラフスケッチ」という暫定的結論で結ばざるをえなかったこと、またさらにその後に、理論的枠組としてのハーバーマスの公共圏論に関する一章を「付論」として加えるといういささか座りの悪い構成をとらざるをえなかったことなどは、すべて私の非力の結果である。ただ、私なりの視点から、上述のアプローチのさらに端緒として、インターネット空間の社会学に関する基本的な論点を整理し提示するという作業には、なんとか一区切りをつけられたのではないかと思っている。

本書の至らざる点、批判されるべき点は、いずれも今後、インターネット空間という新たな社会環境へより着実にアプローチしていく際の課題としたい。そう言い訳することで、読者諸兄姉のご寛恕を得られれば幸いである。

本書の内容は1999年、京都大学大学院文学研究科に提出した博士学位論文「情報ネットワーク社会と公共圏——インターネット空間への社会学的アプローチに向けて」に加筆修正したものである。学位論文を査読していただいた京都大学大学院文学研究科の宝月誠先生、筒井清忠先生、井上俊先生からは、それぞれ的確なご指導とご批判をいただいた。この場を借りて深く御礼を申し上げたい。とりわけ宝月先生には、私がまだ大学院生であった頃から、やがて学位論文の構想・執筆を経て本書の出版に漕ぎ着けるまでのすべての段階において、多くのきわめて懇切なご指導・ご助言をいただいた。本書の内容が多少なりとも学問的著作としての批判に値するものとなっているとすれば、それは先生のおかげである。

また一人一人ここでお名前をあげることはできないが、これまで

研究生活の中で直接に、あるいは（文献リストにあげているものをはじめ）文献を通じて出会った諸先生・諸先輩・同輩・後輩の方々、および（先にも触れたように）パソコン通信を含むインターネット空間の中で出会った人々とのコミュニケーションを抜きにしては、さらに私の気ままな研究生活を様々な面で支えてくれてきた家族の協力なくしては、本書は決して成立しえなかったであろう。そして、最後になってしまったが、本書に一冊の本という姿を与えるうえで、世界思想社の大隅直人氏には大変にお世話になった。これらすべての方々に謝意を表して、「あとがき」を締めくくりたい。

2000年5月
吉田　純

付記　本書の内容の一部は、平成10・11年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）「インターネットにおける市民的公共圏の形成をめぐる社会学的研究」による研究成果である。